

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 17 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380851

研究課題名(和文) 在日・在外外国人コミュニティにおけるコミュニティ感覚の国際比較研究

研究課題名(英文) Psychological Sense of Community and Related Concepts in Minority Communities: A Comparative Global Approach

研究代表者

笹尾 敏明 (SASAO, Toshiaki)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：10296791

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「在日・在外外国人(移民)コミュニティの心理社会的資源を定量的に把握するための査定ツールとしての汎用的コミュニティ感覚尺度」を開発し、在日・在外外国人コミュニティの心理社会的構造を検討することである。そのため、1) 未成年および成人の在日ブラジル人を対象とした質問紙調査、2) 成人の在日コリアンを対象としたフォーカスグループ、3) 成人の在日コリアンを対象とした質問紙調査、および4) 中高生の在日コリアンを対象とした質問紙調査を実施した結果、在日外国人のウェルビーイングの促進を意図した介入プログラムの開発に向けた実証的エビデンスが得られた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the project was to investigate the feasibility of a general purpose sense of community scale applicable to various ethnic and cultural minority groups in Japan, while searching for a theoretical framework for future interventions. Data collected from four sources (a survey with Brazilian children and family members, a focus group interview with Korean adults, a survey with Korean adults, and a school-wide survey of Korean middle and high school students in Tokyo. Both qualitative and quantitative results showed that sense of community is a viable concept to be used in future intervention programs in adults and adolescents in minority communities.

研究分野：コミュニティ心理学、社会心理学、異文化間心理学、予防科学

キーワード：sense of community minority communiti Korean residents Japanese Brazilians rural and urban areas immigrants community psychology adults and adolescents

1. 研究開始当初の背景

現在、在日外国人コミュニティにおける特徴やその問題については、社会学的研究や個人に焦点を当てた研究がなされているが、在日外国人コミュニティそのものの心理社会的な研究は日本ではほとんどなされていない。そのため、彼らのコミュニティがその構成員にとってどのような意味を持ち、どのような心理的機能を持っているのか明らかになっておらず、そのような在日外国人コミュニティの改善やコミュニティへの援助的介入が行えない状態になっている。このようなコミュニティを考える際には、コミュニティ感覚を査定することが重要であると考えられる。

コミュニティ感覚は、コミュニティが内包する心理社会的な資源を、様々な種類のコミュニティに跨って検討することができる指標である。コミュニティ心理学の先駆者である Sarason (1974) は、コミュニティの概念を物理的な地域性だけでなく、心理社会的な共同体感覚を含むものとしてとらえ (植村・笹尾, 2007), このようなコミュニティを理解する上で重要な概念としてコミュニティ感覚を提起した。Sarason (1974) とコミュニティ感覚における4つの要素を同定した McMillan & Chavis (1986) によるコミュニティ感覚は、あらゆる形のコミュニティの普遍的枠組みとして適用できるものとして、現在においても重要な役割を果たしている (笹尾, 2007)。

コミュニティ感覚は単なる個人的変数ではなく、マクロレベルの場所や社会心理的要素を含んだ社会的関係資本 (ソーシャルキャピタル) として位置付けられており (e.g., Long & Parkins, 2007), その尺度も一般的に確立されている。国内では、笹尾ら (2003) が McMillan & Chavis (1986) の構成概念から作成した日本語版 Sense of Community Index (SCI) などが用いられ、様々なコミュニティにおいて検討がなされている。その一方で、コミュニティ感覚は、Sarason (1974) と McMillan & Chavis (1986) による理論的考察によって、その枠組みが規定されているため、必ずしもコミュニティに存在する心理社会的資源を捉えきれていないという課題が指摘できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来的一部分だけを捉えて全体を類推するような尺度ではなく、どのような資源が、どの程度あるのかについて査定することを目的とした「在日・在外外国人 (移民) コミュニティの心理社会的資源を定量的に把握するための査定ツールとしての汎用的コミュニティ感覚尺度」を開発し、在日・在外外国人コミュニティの心理社会的構造を検討することにある。そのために、多様なコミュニティの中において、社会的関係資本を定性的・観察的に評価した上で、定量的に評価するという枠組みを作り、生態学的妥

当性・基準関連妥当性を確保し、在日・在外外国人コミュニティでの調査を通して異文化間妥当性を担保するものとして開発する。さらに、在日外国人コミュニティにおけるコミュニティ感覚を含む、彼らのウェルビーイングを促進する要因を多角的に検討することも目的とした。本研究により、在日外国人のウェルビーイングの促進を意図した介入プログラムの開発に向けたエビデンスが蓄積されることが期待される。

3. 研究の方法

本研究では、質的と量的アプローチの統合的検討から、様々なコミュニティに適用可能な生態学的妥当性を確保し、異文化間妥当性を確保する。

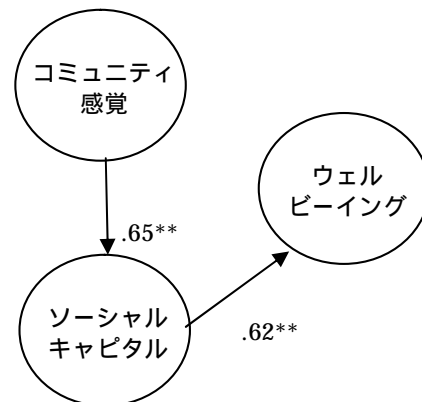
本研究では、在日外国人の中でも、ブラジル人および韓国人に焦点を当て研究を進めることにした。調査の実現可能性に加え、韓国人を対象にした理由としては、日本と韓国の歴史的背景や、それに起因するヘイトスピーチなどが国内で行われている現状が挙げられる。在日コリアンのウェルビーイングの低下が予想される昨今、彼らに焦点を当てた取り組みは、社会的正義を中核とするコミュニティ心理学の理念に強く同調するものと考えた。

本研究は、1) 未成年および成人の在日ブラジル人を対象とした質問紙調査 (量的アプローチ) に加え、2) 成人の在日コリアンを対象としたフォーカスグループ (質的アプローチ), 3) 成人の在日コリアンを対象とした質問紙調査 (量的アプローチ), 4) 中高生の在日コリアンを対象とした質問紙調査 (量的アプローチ) で構成される。

4. 研究成果

1) 未成年および成人の在日ブラジル人を対象とした質問紙調査

未成年および成人の在日ブラジル人を対象とした質問紙調査の結果、コミュニティ感覚がソーシャルキャピタルを高め、ソーシャルキャピタルが主観的ウェルビーイングを高めることなどが示唆された (図1)。



$\chi^2(116)=181.00, p=.000; CFI=.888; RMSEA=.090$

図1 (結果の一部の抜粋)

2) 成人の在日コリアンを対象としたフォーカスグループ

成人の在日コリアンを対象にフォーカスグループを実施した結果、彼らの日本における具体的な経験が明らかになった(表1)。また、フォーカスグループを通して、「日常的な困難に対するレジリエンス」「言語能力」「情報収集」「援助希求」「社会的つながり」「相互的な多文化理解」が在日コリアンのウェルビーイングを高めることが示唆された。

表1 日本における経験(結果の一部の抜粋)
日本における経験

ネガティブ	ポジティブ
・差別	・親切的な日本人
・言語的課題	・課題を共有でき、助け合える友人
・情報検索の困難	・辛いことを経験しても、頑張ったこと

3) 成人の在日コリアンを対象とした質問紙調査

成人の在日コリアンを対象とした質問紙調査の結果、日常生活におけるレジリエンスおよび日本人がいかに多文化を理解しているかという認知が、在日コリアンのウェルビーイングを促進することなどが示唆された(表2)。

表2 (結果の一部の抜粋)

変数	人生満足感
ステップ1	
性別	-.039
年齢	.188
日本での生活年数	.203
R ²	.035
ステップ2	
レジリエンス	.419***
言語能力	-.032
情報収集	-.064
援助希求	-.177
社会的マナー	.061
多文化理解度	.108
日本人の多文化理解度の認知	.199*
R ²	.244**
ステップ3	
コミュニティ感覚	-.068
コミュニティとのつながり感	.198
R ²	.024
R ²	.303**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4) 中高生の在日コリアンを対象とした質問紙調査

中高生の在日コリアンを対象とした質問紙調査の結果、教員とのつながりや、コミュニティ感覚の構成要因である「情緒的結合」や「影響」が、人生満足感を高めること、日本での生活年数の長さが、人生満足感を低下させることなどが示唆された。

表3 (結果の一部の抜粋)

変数	人生満足感
ステップ1	
性別	.09
日本での生活年数	-.14*
文化的融合	.07
R ²	.07**
ステップ2	
学校へのコミュニティ感覚	.08
教員とのつながり	.25*
両親からのストレス	-.08
R ²	.09***
ステップ3	
ニーズの充足	.05
情緒的結合	.14*
影響	.16*
メンバーシップ	-.05
R ²	.05**
R ²	.303**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

さらに、将来へのポジティブな展望を持っていることをウェルビーイングとして捉えた場合、「教師とのつながり」「学校コミュニティ感覚」「地域コミュニティ感覚」が、将来の展望を高めることなどが示唆された。

表4 (結果の一部の抜粋)

変数	将来の展望
ステップ1	
性別	-.018
発達段階	.214***
日本での生活年数	-.156***
R ²	.073***
ステップ2	
教師とのつながり	.304***
学校コミュニティ感覚	.135**
地域コミュニティ感覚	.140**
R ²	.188***
R ²	.250***

< 主な引用文献 >

- Sarason, S. B. (1974). The psychological sense of community: Prospects for a community psychology. San Francisco: Jossey-Bass.
- McMillan, D. W., & Chavis, D. M. (1986). Sense of community: Definition and theory.

Journal of Community Psychology, 14, 6-23.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

笹尾敏明 (2017). 「こころのグローバル化」とコミュニティ心理学にみる「文化の多様性」 こころと文化 1月号 査読有 pp.23-29

笹尾敏明 (2017). 多文化に生きる子どもにとっての「アイデンティティの危機」とは? 児童心理 2月号 査読有 pp.19-25

〔学会発表〕(計 5 件)

Naoki Hatta, Toshiaki Sasao, Tori Homma, Ai Suzuki. Identifying Multi-Layered Source of Well-being among Korean parents in Japan: A Test of the Life Resources Model for an Ethnic Minority Community, 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July, 2016.

Toshiaki Sasao, Naoki Hatta, Tori Homma. Contextualizing Well-Being among Korean adolescent living in Japan: Effects of School, Family and Community Resources across Differing Contexts, 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July, 2016.

笹尾敏明 八田直紀 榊原佐和子 玉井航太, これからのコミュニティ介入における「ライフリソース」再考: 「社会正義」の文脈における効果的なプログラム構築と評価の課題, 第 19 回日本コミュニティ心理学会, 栃木, 2016 年 6 月

Toshiaki Sasao, John P Barile, Susana Helm, Lisette Brunson, Jessica Norman, Naoki Hatta, Rina Ikebe. Revisiting What, How, and Why of Prevention Research at the Crossroads: Challenges and Opportunities, 41st Society for Community Research & Action Biennial Conference, Lowell, US, June, 2015.

笹尾敏明 八田直紀 杉山あゆ美 大内潤子 玉井航太, エンパワメント概念の再考: アクションリサーチへの展望, 第 17 回日本コミュニティ心理学会, 京都, 2014 年 6 月

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笹尾 敏明 (SASAO, Toshiaki)
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号: 10296791

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者

清水 安夫 (SHIMIZU, Yasuo)
国際基督教大学・教養学部・上級准教授
研究者番号: 00306515

(4) 研究協力者

Paul Toro
ミシガン州ウェイン州立大学・教授

Kyung Ja Oh
延世大学・教授

Anna Bokcszcanin
オポーレ国立大学・教授

玉井航太 (TAMAI, Kota)
北海商科大学・准教授

李創鎬 (LEE, Chang-ho)
精神医学研究所東京武蔵野病院精神科医
長

Elizeu Coutinho de Macedo
マッケンジー長老派大学・准教授